
【短文】蒲公英の思い出

星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【短文】蒲公英の思い出

【コード】

N0442Y

【作者名】

星

【あらすじ】

子供の頃に裏路地で見た蒲公英は……ある人物の随想。半分、実話です。 台詞は一切ありません。

今から十年以上前、私が小学生の頃。学校からの帰り道は、いつも何十分もかけてうろついている事が多かった。私の両親は共働きですぐに帰ったところで家には誰もいないから、そうやって時間を潰していたのだ。これは、そんなある日の話である。

その日はいつもは通った事がない道を選びながら帰っていた。私とは反対方向へ帰る子供達の通学路、学校裏の少し不気味なお宮前の通り、日常ですら滅多に通ることのない脇道。そんな道を、意図的に選びつつ歩いていた。

そして辿り着いた、風の吹き込まない、薄暗い裏路地。

その道は家の近所にあつたのだが、私はその時まで通った事は殆どなかった。少しだけ興味津々に辺りを見回しつつ、時にしゃがみ込んで観察しながら、私は歩いた。

群生する毒だみの花。花壇に植えられた鈴蘭の花。足元の土に埋まる変形タイル。そして、その風景の中ぼつりと咲く、否、咲いていただろう、一輪の蒲公英。たんぽぽ

それは、蒲公英の綿毛の成れの果てだった。

蒲公英は花が枯れたなら、種をより遠くへ飛ばすために綿毛を作る。それは言わずとも皆が知っていることだ。

その蒲公英も例外ではなかった。恐らく十何日か前までは、ありふれながらも美しい、素朴な花を咲かせていたのだろう。そしてその花を枯らし、子孫を残すために種子と綿毛を生み出した。

しかし、その蒲公英は、綿毛さえも茶色く乾き、枯れ果て、白い綿毛の球体の形のまま、みすばらしい茶色の歪な球体と化してい

た。風が吹き込む事が殆ど無いこの場所では、その種を空へと飛ばす事ができなかつたのだらう。

気付いた時、私はその蒲公英を手折り、綿毛としての役目を果たせなくなつた茶色のそれを地面へバラバラと落としていた。

結局、小学生を卒業するまで寄り道の癖は抜ける事はなかつた。それどころか中学校は少し遠い場所にあつたために、行動範囲が広がって更に酷くなつた。だがあの日以降、春にあの道を通る事はなくなつた。通るとしても秋や冬が殆どだつた。無意識の内に、またあの風景を見るのではないかと恐れていたのかも知れない。

今では私は成人し、社会人にもなっている。仕事場へは実家から通い、実家の位置はあの頃と全く変わらない。例の路地の近くが通勤ルートだ。しかしそれでも私はあの裏路地へ近付かない。

結局の所、私が綿毛すらも枯れてしまった蒲公英を見たのはあの一度きりであり、きつとこれから先も見ることはないだらう。

あの裏路地にはら蒔いた種がどうなつたのか。私は今も知る勇気が持てないままでいる。

(後書き)

きつと殆どの方は見た事がないそれを、見てしまったのは幸か不幸か。

私は今でも、分かりません。

1 1 1 0 3 0

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0442y/>

【短文】蒲公英の思い出

2011年10月30日05時26分発行